

Emersonの'The American Scholar'について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重松, 宗育 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008654

EMERSON の ‘THE AMERICAN SCHOLAR’ について

重 松 宗 育

〔I〕

1837年8月に Harvard 大学で行われた ‘The American Scholar’ 講演は、前年の *Nature* と翌年の ‘The Divinity School Address’ と共に、一般に一連の三部作として扱われている。*Nature* で「自然」に、‘The American Scholar’ では「人間」に、‘The Divinity School Address’ で「神」に焦点をあてたと言えるとしたら、自然、人間、神という、いわゆる “a triangle of relationships”¹ の視点から、それぞれのテーマを、三角形の一辺として論じていることになるからである。終始 Emerson の最大の関心が、個人としての人間の生き方にあったという事実を考えると、これら三辺の中でも、最も重要な一辺が ‘The American Scholar’ であると言ってもよいであろう。

また、S. E. Whicher は、*Nature* を “First Fruits” と、‘The American Scholar’ を “Challenge”² と呼んでいる。確かに、初版 500 部のあと再版が出るまで13年もかかり、一部の知識人の注目を集めたにすぎなかった *Nature* に比べ、その反響と与えた影響の大きさという面からすれば、‘The American Scholar’ は、アメリカ社会に対して自己の信念を問うた最初の “Challenge” の講演と呼ぶべきかも知れない。ともかく、これが Emerson にとって、最も記念すべき講演であり、代表作の一つであることは間違いない。

それでは、まず、この講演をめぐる事情について簡単にまとめておくことにする。

1837年6月の末、Emerson のもとに、C. C. Felton という人物から、8月31日、ケンブリッジの “Phi Beta Kappa”³ の例会で講演をしてほしいという依頼の手紙が届いた。それは、予定の講演者 Reverend. Dr. Wainwright が断わってきたための代役であった。しかし、急な依頼であったにもかかわらず、

学者というもののあり方についての年来の主張を公けするには絶好の機会であると考えた Emerson は、むしろ積極的に引き受けることにしたにちがいない。

因みに、Emerson が、学者のあるべき姿について、それ以前から思索を続けていたことは、既に1835年8月の日記に、次のような一節があることから明らかである。

I think I may undertake one of these days to write a chapter on Literary Ethics or the Duty & Discipline of a Scholar.⁴

また、翌1836年にも同様な文章がある。

In that Sermon to Literary Men which I propose to make, be sure to admonish them not to be ashamed of their gospel....Put in the Sermon to Scholars the brave maxim of the Code of Menu;⁵

In the scholar's Ethics, I would put down Beharre wo du stehst. Stick by yourself,...⁶

これらを読むと、ごく近いうちに書き上げる予定でもあったように思えるが、実際には、計画を持ちながらも、何らかの事情で機が熟さなかったことと思われる。

ところで、講演の依頼をうけた前後は、ほとんど日記が書かれていない。6月29日に、

Almost one month lost to study by bodily weakness & disease.⁷

と記されているところを見ると、講演の依頼と受諾の前1カ月は、身体の調子が思わしくなかったのであろう。ただし、7月半ばごろになると、次第に日記の量は増えてゆくが、Emerson が講演について直接ふれているのは、次に引用する2カ所である。

そのひとつは、講演を1カ月後にひかえた7月29日の日記であるが、それによって講演のテーマが次第に固まりつつあることがわかる。

If the Allwise would give me light, I should write for the Cambridge men a theory of the Scholar's office.⁸

そして、この文章に引き続いて、読書の意味について論じているが、それはかなり原文に近い形で講演の中に利用されている。また、10日余りを残すばかりの8月18日の日記には、次の記述がある。

The hope to arouse young men at Cambridge to a worthier view of

their literary duties prompts me to offer the theory of the Scholar's function.⁹

こうして、8月31日の正午より、ケンブリッジの Harvard 大学において、Phi Beta Kappa Society のメンバー 215 人とゲストたちを前にして、1時間15分にわたる 'The American Scholar' 講演がおこなわれたのである。

この講演によって、Emerson は、新進の講演者として、一躍その名を高めることになった。そして、この時の様子を、J. R. Lowell は次のように書き残している。

His oration before the Phi Beta Kappa Society at Cambridge, some thirty years ago, was an event without any former parallel in our literary annals, a scene to be always treasured in the memory for its picturesqueness and its inspiration. What crowded and breathless aisles, what windows clustering with eager heads, what enthusiasm of approval, what grim silence of foregone dissent! ¹⁰

また、Lowell と同様に聴衆のひとりであった O. W. Holmes もその時の感動を次のように記している。

The dignity, not to say the formality of an Academic assembly, was startled by the realism that looked for the infinite in "the meal in the firkin; the milk in the pan." They could understand the deep thoughts suggested by "the meanest flower that blows," but these domestic illustrations had a kind of nursery homeliness about them which the grave professors and sedate clergymen were unused to expect on so stately an occasion. But the young men went out from it as if a prophet had been proclaiming to them "Thus saith the Lord." No listener ever forgot that Address...¹¹

また Emerson 自身が、およそ2カ月近くたった10月24日の日記に、この講演の冊子 500 部が、たったの1カ月のうちにすべて売り切れたことを知った旨を書きとめていることから、その反響の大きさが知られるのである。¹²

それでは、次に、講演の内容について出来る限り原文に則して検討することにしたい。

[II]

学者とは、“Man Thinking”であるということ、学者は、自然と書物と行動によって“discipline”を受けるべきこと、そして、学者の“duty”は、“self-

trust”にあるということ、これが講演の骨子であると言ってよい。

まず、Emerson は、神が“Man”を色々な人間に分割したのは、人間を互いに助け合わせるのが目的であったという寓話を借りて、彼の重要なテーマのひとつである「個(Each)と全体(All)の関係」¹³について、簡単に説明している。

The old fable covers a doctrine ever new and sublime; that there is One Man, —present to all particular men only partially, or through one faculty; and that you must take the whole society to find the whole man. Man is not a farmer, or a professor, or an engineer, but he is all. Man is priest, and scholar, and statesman, and producer, and soldier.(pp.82-3)

本来、一個の人間は、あらゆる可能性を内蔵した“One Man”が、部分的に、また一機能を通じて、個体の形をとり顕現したものであって、それらが集まり社会を構成しているのであるから、人間を知るためには、社会全体を見る必要がある。つまり、人間社会においては、便宜的に様々な職種に分かれてはいるが、それは単に職能上のことにすぎないのであって、本来個々の人間は、あらゆる能力の可能性を秘めているのである。しかし、現実の職分化の進んだ社会においては、それぞれが“one faculty”を発揮することによって、社会を構成してゆくことになるのであるが、このような社会の中では、学者は“the delegated intellect”であり、“Man Thinking”がその理想の姿である、と Emerson は考えているのである。勿論、この“Man Thinking”は、人間のもつ能力の一部にすぎない“Thinking”という“one faculty”を通して社会に貢献する“Man”であって、あくまでもこの“Man”の方に重点がおかれていることに注意しなければならない。つまり、Emerson は常に全人的存在としての学者を考えていることが一つの特徴である。

さて、Emerson は、学者の基本的な“discipline”に必要なものとして、(1)“nature”, (2)“books”, (3)“action”をあげている。

これらのものは、“Man Thinking”である学者が、自己の何者たるかを自覚するための、つまり宇宙(All)における個(Each)としての自己の位置を確認するための手がかかりであり、いわば自己を写し出す鏡のようなものである。これらに直面し凝視することによって、信頼に値する本来の自己を自らの中に見出すこと、そしてそれ故に自己を信頼すること、これが Emerson の生涯における課題だったのである。

(1) Emerson は、まず第一に“nature”をとりあげる。自然界には様々な存

在がある。太陽あり、星あり、風あり、草がある。これらは一体如何なる存在なのか。一体何を意味しているのか。

To the yong mind every thing is individual, stands by itself. By and by, it finds how to join two things and see in them one nature; then three, then three thousand; and so, tyrannized over by its own unifying instinct, it goes on tying things together, diminishing anomalies, discovering roots running under ground whereby contrary and remote things cohere and flower out from one stem. (p.85)

精神が未熟なうちは、すべては無関係に、孤立して存在しているように見える。しかし、精神の成熟と共に、自然の神秘を深く凝視すれば、そこに万物を貫く“roots”の存在していることに気がつく。「天地一体、万物同根」なのである。この“roots”は、森羅万象を構成している、ありとあらゆる個々の存在の中心を貫いているのであるから、自然界の一存在である人間も、またこの“roots”に連っているのは当然のことである。

Thus to him, to this schoolboy under the bending dome of day, is suggested that he and it proceed from one root; one is leaf and one is flower; relation, sympathy, stirring in every vein. And what is that root? Is not that the soul of his soul? (p. 86)

自然を直視する学者は、実はこの“root”は、自らの魂の中を貫き、万物を貫いている普遍的な“soul”であることを知る。そして、自然界のあらゆる存在と、人間の魂とは同一の根源をもち、共通の法則の下にあるのであるから、自然界の法則と人間の内なる法則とは、表裏一体をなすものであり、互いに対応する関係にあることになる。

He shall see that nature is the opposite of the soul, answering to it part for part. One is seal and one is print. Its beauty is the beauty of his own mind. Its laws are the laws of his own mind. Nature then becomes to him the measure of his attainments. (pp. 86-7)

かくして、“Study nature”ということは、自然界における自己の位置を認識すること、つまり“know thyself”ということと一致するのである。自然を直視することは、実は自然という鏡に写った自己自身の姿、自己の魂を凝視することに他ならないからである。

(2) 続いて、第二にあげているものは、“books”に代表される“the mind of the Past”である。偉大な書物というものには、必ず過去の偉大な精神の真実の吐露がある。その精神の躍動を追体験すること、時間を超えて普遍的な精

神と同一の体験をすることによって、自己の普遍性を確認すること、それが書物を通しての、学者の“discipline”である。

It is remarkable, the character of the pleasure we derive from the best books. They impress us with the conviction that one nature wrote and the same reads. We read the verses of one of the great English poets, of Chaucer, of Marvell, of Dryden, with the most modern joy,—with a pleasure, I mean, which is in great part caused by the abstraction of all *time* from their verses. There is some awe mixed with the joy of our surprise, when this poet, who lived in some past world, two or three hundred years ago, says that which lies close to my own soul, that which I also had well-nigh thought and said.(pp.91-2)

読書とは、過去の普遍的精神の記録したものを、同一の精神を持った者が読んで、時間を超越して同一の体験をし、共感を持ち、畏敬の念を持って、人間精神の普遍性を確認することだ、と Emerson は考えている。

また、この際重要なことは、読書は“creative”でなければならないことである。ともすると、“Man Thinking”を放棄して、“bookworm”になりさがることがある。

Meek young men grow up in libraries, believing it their duty to accept the views which Cicero, which Locke, which Bacon, have given; forgetful that Cicero, Locke, and Bacon were only young men in libraries when they wrote these books. (p.89)

決して、書物そのものを偶像崇拜の対象としてはならない。決して、人間が書物に従属するようなことがあってはならないのである。

There is then creative reading as well as creative writing. When the mind is braced by labor and invention, the page of whatever book we read becomes luminous with manifold allusion. Every sentence is doubly significant, and the sense of our author is as broad as the world.(p.93)

読書は、行間に自らが創造してゆく営みである。書物を通して、過去の精神と対決し、人間の普遍性を確認する営みなのである。Emerson は、常に創造的な姿勢で書物に臨まなければ、真の個としての自己の普遍性を自覚することはありえない、と信じているのである。

(3) 学者の訓練に必要な第三の要素は“action”である。

Action is with the scholar subordinate, but it is essential. Without it he is not yet man. Without it thought can never ripen into truth. (p. 94)

学者にとって、“action”は“subordinate”とはいえ“essential”である、と Emerson は言う。つまり、自然と書物から得られた精神的なレベルでの自己認識を、実践行動という具体的な形をとり、自己の肉体を参加させることによって、更に確実な体験として完成させるべきだと考えているのである。

The preamble of thought, the transition through which it passes from the unconscious to the conscious, is action. (pp. 94-5)

思索の営みの完成には、必然的に行動という過程を通らなければならないが、視点を変えれば、行動が思索の契機となる一面も確かにある。この意味で、思索と行動は、相依相関の関係にあると言える。

The mind now thinks, now acts, and each fit reproduces the other. When the artist has exhausted his materials, when the fancy no longer paints, when thoughts are no longer apprehended and books are a weariness, —he has always the resource *to live*.... He can still fall back on this elemental force of living them. This is a total act. Thinking is a partial act. (p. 99)

Emerson は、“thinking”は“a partial act”にすぎないと考える。行動を伴った全人的活動、“a total act”の中にこそ、人間性の原点がある。そして行動という具体的体験は、間違いなく自己存在の認識を更に深めるものだという事実を、彼は痛感していたのである。

それ故、彼は“labor”というものを高く評価している。

I hear therefore with joy whatever is beginning to be said of the dignity and necessity of labor to every citizen. There is virtue yet in the hoe and the spade, for learned as well as for unlearned hands. And labor is everywhere welcome; always we are invited to work;... (p.100)

労働ということの中に、“dignity”があり、学者の人間完成にとって、労働は“necessity”であると言っている。そして、ここにこそ、Emerson の人間洞察の眼の確かさが感じられるのである。

〔Ⅲ〕

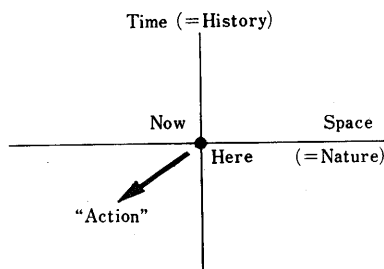
以上のように、学者の自己訓練の方法について Emerson の説くところをまとめてみた。次に、自然と書物と行動との関係について検討してみたい。

まず、思索の営みの最初の手がかりは、空間と時間ということであるが、興味深いことに、Emerson のあげた三つの要素のうち、自然とは空間的存在で

あり、過去の精神を表わす書物は時間的存在であると言える。それ故、次のように説明してみることにする。

まず空間としての自然と自己との関係を横軸にとり、時間としての歴史（書物）と自己との関係を縦軸にとると、それらの交わる座標の原点、つまり、無限の宇宙空間の中の Here という一点、永遠の時間の流れの中の Now という一点とが重なりあった原点にある存在が「自己」である。そして最も肝要なことは、Here と Now という存在の原点

に立つ自己が、第三の要素である“action”という自由自在な動きを発揮する時、つまり無限の宇宙空間と永遠の時間の交差する一点にありながら、その時間空間の限定を超えて、自己の魂が自由自在に躍動する時、そこに絶対的個体としての自己完成がある、と Emerson は考える。更に換言すれば、



彼が学者に課したことは、時間空間という全体 (All) の中の一点にすぎない個 (Each) でありながらも、全体の限定に埋没することなく、自由な働きをもって全体に関わってゆくような個体としての自己の実現なのである。

Emerson の考えている個は、決して静止した受動的な単位ではなくて、常に能動的に躍動する個体であり、それは個即全、全即個とも言うべき、全体と有機的な関係をもった絶対的な個体なのである。

Is it not the chief disgrace in the world, not to be an unit; —not to be reckoned one character; —not to yield that peculiar fruit which each man was created to bear, but to be reckoned in the gross, in the hundred, or the thousand, of the party, the section, to which we belong; and our opinion predicted geographically, as the north, or the south? Not so, brothers and friends—please God, ours shall not be so. We will walk on our own feet; we will work with our own hands; we will speak our own minds. (p. 115)

講演の結び近くにあるこの一節こそ、正に ‘The American Scholar’ の、いや Emerson の思想全体の中核をなすものであると言ってよいであろう。個人は、“party” や “section” という全体に属する一員であるが、決して、全体の中に埋没して十把一からげで数えられるような存在であってはならない。まして自分の見解を述べる前に、その所属する “party” や “section” を言いあ

てられることは、個人として最大の “disgrace” なのである。そうあってはならない。社会という全体を構成するための唯一絶対的存在としての “an unit” であり、先例のない、取りかえのきかない、ユニークな存在としての “one character” でなければならないのである。全体と関わりつつ、自らの足で歩き、自らの手で働き、自らの真情を語ることのできる存在でなければならない。これが Emerson がくりかえし主張する、一個の人間としての学者の理想像なのである。

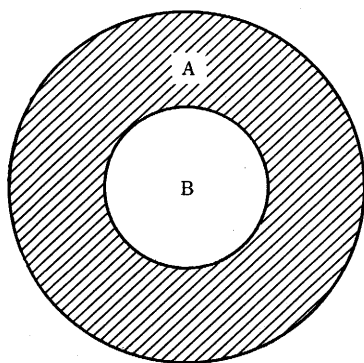
[IV]

以上のことは、学者の “duty” とは即ち “self-trust” だという講演の結論へと直接つながってゆく。それ故、次に視点を変えて、この “trust” に値する “self” の内部構造を明らかにしなければならない。

Emerson は、次のように言っている。

The one thing in the world, of value, is the active soul. This every man is entitled to; this every man contains within him, although in almost all men obstructed and as yet unborn. The soul active sees absolute truth and utters truth, or creates. In this action it is genius; not the privilege of here and there a favorite, but the sound estate of every man. (p. 90)

この一節に従って人間の自我の構造を図示すれば、次のようになろう。



A - 本来のSelfの顕現をさまたげる
表面的なself

B - 信頼に値する本質的な自己、
即ち本来のSelf
“genius”
“the active soul”

人間の自我というものは、この図のような二重性をもつのであるが、Emerson が、“self-trust” という時の “self” とは、正にこの内側にある “the active

soul”なのである。これは、生来万人が内蔵している、より本質的な自己であるが、ほとんどの人間はこの自我の二重性という事実を自覚しない。内在するこの本性に覚醒し、周囲をとりまいてその活動をさまたげている表面的な自我を放逐すれば、本質的な自己は、生来の性質に従って躍動をはじめ、創造の活動をはじめめる。そしてその時、“the active soul”は“genius”の名で呼ばれるが、これこそ万人の健全な精神状態に他ならないと Emerson は主張する。彼は、人間の自我の二重性を認めた上で、表面的な自己を超克し、より本質的な自己である“the active soul”を信ずる“self-trust”を説くのである。

因みに、“The American Scholar”講演の3カ月程前の日記には、“an Individual”についての次のような思索が記されている。

Who shall define to me an Individual? I behold with awe & delight many illustrations of the One Universal Mind. I see my being imbedded in it. As a plant in the earth so I grow in God. I am only a form of him. He is the soul of Me. I can even with mountainous aspiring say, *I am God*, by transferring my *Me* out of the flimsy & unclean precincts of my body, my fortunes, my private will, & meekly retiring upon the holy austerities of the Just & the Loving—upon the secret fountains of Nature.¹⁴

人間の本性、即ち“the active soul”とは、実は“the One Universal Mind”(=God)であり、それが、“the soul of ME”なのである。それ故、“my body”や“my fortunes”や“my private will”といった、本来の自己にまわりついた表面的な自我を取除こうとする限り、“I am God.”とさえ言える。この意味で、“self-trust”とは、実は“God-trust”¹⁵のことに他ならないのである。

さて、このように自己の本質は絶対善であるからには、学者は当然自己を信頼すべきである。

Long he must stammer in his speech; often forego the living for the dead. Worse yet, he must accept—how often!—poverty and solitude. For the ease and pleasure of treading the old road, accepting the fashions, the education, the religion of society, he takes the cross of making his own, and, of course, the self-accusation, the faint heart, the frequent uncertainty and loss of time, which are the nettles and tangling vines in the way of the self-relying and self-directed; and the state of virtual hostility in which he seems to stand to society, and especially to educated society. (p. 101)

間違いなく、学者の自己究明の道は、厳しく遠い茨の道である。にも拘らず、

彼にとって自己を信頼することこそ “duty” なのである。

For all this loss and scorn, what offset? He is to find consolation in exercising the highest functions of human nature. . . . He is to resist the vulgar prosperity that retrogrades ever to barbarism, by preserving and communicating heroic sentiments, noble biographies, melodious verse, and the conclusions of history. (pp. 101-2)

学者は、人間の本性に備わっている最高の機能 “the highest functions” を発揮することに慰めを見出し、そして誇りを持つべきである。敢然として、表面的な自我のもたらす “the vulgar prosperity” に立ち向い、人間本性に備わる普遍的な価値を、文芸や歴史の教訓を通して、人々に伝えてゆかなければならないのである。

The office of the scholar is to cheer, to raise, and to guide men by showing them facts amidst appearances. (p. 100)

見せかけの現象 “appearances” の波間に漂う人々に対して、真理 “facts” を示すこと、それこそが学者の “duty” である。そして、このように学者が自己の本性を信頼して精進を重ねている限り、成功は自ら追いかけてくるのだと Emerson は考える。

He then learns that in going down into the secrets of his own mind he has descended into the secrets of all minds. . . . the deeper he dives into his privatest, secretest presentiment, to his wonder he finds this is the most acceptable, most public, and universally true. (p. 103)

自己の精神の深奥を凝視し、その秘密を知りえた者は、同時に万人の精神の深奥の真実を解明したことになるからである。それはまた、各人の内部にある本性 “the active soul” が、正に普遍的な精神 “the universal soul” に他ならないからである。それ故にこそ、「最も私的なもの」 “his privatest, secretest presentiment” が、「最も普遍的なもの」 “the most public, and universally true” だというパラドックスが成立しうるのである。

そして、Emerson が、“one soul which animates all men” (p. 108) と呼び、また “the Divine Soul which also inspires all men” (p. 115) と呼んだものは、この普遍的精神のことなのである。

こうして、学者が自己を信じてその本性を卒直に吐露すれば、他の人間の内部にある “the active soul” におのずから共感し共鳴するはずである。それ故に、学者たる者は自己を信頼しなければならない、と Emerson は主張してい

るのである。

また、Emerson は、学者が自己の “the active soul” を十分に活動させるためには、自由であることが必須の条件となることも指摘している。言うまでもなく、“the active soul” は、自由で創造的な働きをするのが本来の姿である以上、それを妨げるものは、すべて排除しなければならないからである。

There are creative manners, there are creative actions, and creative words; manners, actions, words, that is, indicative of no custom or authority, but springing spontaneous from the mind's own sense of good and fair. (p. 90)

精神の自由を束縛する “custom” や “authority” のようなものから自由を保ち、自己の内部から自発的に湧いてくるものをこそ信ずるのである。本来 “the active soul” は “progressive” なものであるから、一箇所に停滞すると、その人間性は死滅することになる。それ故に、自己自身の魂の自発性を信じて、一瞬一瞬の自由の中で、新たな創造に励まなければならない。

He in whom the love of Truth predominates will keep himself aloof from all moorings & afloat. He will abstain from dogmatism & recognize all the opposite negations between which as walls his being is swung.¹⁶

あらゆる “moorings” から自由を保ち、日々新たな創造を志すのが学者の任務である。実に、Emerson が終始目差していたものは、こうした徹底的な人間主体性の確立だったのである。

[V]

それでは次に、‘The American Scholar’ 講演をめぐるいくつかの問題点について検討したいが、これらはそれぞれに独立した論文にまとめる必要のある問題ばかりであるから、ここでは略述するにとどめたい。

(1) まず第一に、この講演と、他の著作との関連について一言ふれておくことにする。1841年に出版された *Essays, First Series* の中には、‘Self-Reliance’ と ‘Compensation’ という二篇のエッセイが含まれているが、この二つの思想が、Emerson の人生観の中心を貫く信念であったと言ってよいだろう。

一般的に言って、Emerson の著作は、日記を媒介として、有機的に関連しあっているのが特徴であるから、そこかしこに同じ趣旨の文章を指摘すること

は、比較的容易である。ただし ‘The American Scholar’ が、真正面から人間の主体性を論じ “self-trust” を主張した点で、数年後の ‘Self-Reliance’ へと発展していった事実は明白であり、その経過と関連とについては十分に検討すべきであるが、ここでは省略しておく。

また、‘Compensation’ へとつながってゆくとみられる文章として、次の一節をあげておきたい。

Drudgery, calamity, exasperation, want, are instructors in eloquence and wisdom. The true scholar grudges every opportunity of action past by, as a loss of power. It is the raw material out of which the intellect moulds her splendid products. (pp. 95-6)

“Drudgery” や “calamity” や “exasperation” や “want” のように、現在の私にとってマイナスの要素も、action のための貴重な機会と考えて誠実に対処してゆけば、必ずそれらは、時間の経過と共に “instructors” の様相を帯びてくるものだという考え方は、そのまま “Compensation” の思想につながってゆくとと言える。更に “genius” と “the hero” についての考え方は、1850年の *Representative Men* へ発展してゆくことも、つけ加えて指摘しておく。

(2) O. W. Holmes は、‘The American Scholar’ を “our intellectual Declaration of Independence”¹⁷ と名づけたが、次にこの点を吟味しなければならない。

Emerson は、講演のはじめに、

Our day of dependence, our long apprenticeship to the learning of other lands, draws to a close. The millions that around us are rushing into life, cannot always be fed on the sere remains of foreign harvests. (pp. 81-2)

と、ヨーロッパへの隷属を断ち切るべき時が来ていることを、聴衆に向って熱っぽく説いた。そして、また終り近くでも、

We have listened too long to the courtly muses of Europe. (p. 114)

と、同じ趣旨をくり返している。

当時のアメリカ社会は、既に念願の政治的独立を果たし、共和国の建設に成功した自信に加えて、更に文化的な意味でも、ヨーロッパの模倣の時代に訣別し、アメリカ独自の文化を創造することを待ち望む気運がみなぎっていた。そんな時代にあっては、Emerson のこのような主張は全く時宜を得たものと言える。この辺りの事情について、Lowell は、次のように説明している。

The Puritan revolt had made us ecclesiastically, and the Revolution politically independent, but we were still socially and intellectually moored to English thought, till Emerson cut the cable and gave us a chance at the dangers and the glories of blue water.¹⁸

あるいは、Emerson の伝記を書いた James E. Cabot は、この講演を、

“a much needed monition to the cultivated class of persons in New England to think for themselves instead of taking their opinions from Europe or from books”¹⁹

と、評言しているが、これは適切である。

勿論、Emerson 自身、ヨーロッパの文人たちを強く意識してきたことは間違いない。

この講演より数年前の1832年、Emerson は、牧師職を辞して、ヨーロッパへ旅立った。それは、自己の育ったアメリカ文明の源流を、自らの眼で確認したいという欲求があったからでもあろうし、更にまた、ヨーロッパの代表的文人たちと出会いをもつことによって、自己の位置を確認することも目的であったにちがいない。そして、首尾よく彼らとの談合の機会を得たことに感謝しつつ、アメリカへの帰途についた。ところが船中にて書かれた日記には次のような所感が記されている。

I thank the great God who has led me through this European scene, ... He has shown me the men I wished to see—Landor, Coleridge, Carlyle, Wordsworth—he has thereby comforted & confirmed me in my convictions. Many things I owe to the sight of these men. I shall judge more justly, less timidly, of wise men forevermore. To be sure not one of these is a mind of the very first class... Especially are they all deficient all these four—in different degrees but all deficient—in insight into religious truth. They have no idea of that species of moral truth which I call the first philosophy.²⁰

この体験は、Emerson にとって非常に重い意味を持っていた。この “less timidly” ということばからも明らかなように、それまでの Emerson は、やはり潜在的にヨーロッパの文人に対するコンプレックスを持っていた。ところが、実際に会ってみると、Carlyle を除いて彼らがみな60歳前後の老詩人になっていたこともあろうが、案に相違して、彼らは、皆一様に “religious truth” に対する洞察力に欠けている、と Emerson は感じたのである。これは、30歳の青年にしてはいささか不遜なことばに思えるが、ともかく、この体験が彼の “the

first philosophy”に対して自信をもたせ、self-trustの信念を強めさせる結果をもたらしたにちがいない。

そして、この体験があればこそ、Emersonは、アメリカの文化のヨーロッパへ依存する時代は終った、と高言することができたのである。

しかし、文学史、文化史的な意味で、この講演を“our intellectual Declaration of Independence”として高く評価するのは至極当然としても、当時のアメリカのnationalismの時代背景と先にあげた二つの文章を余り強調しすぎて、偏屈なnationalismと解釈するのは、首肯しがたい。この意味で、この講演は、“American chauvinism”の宣言書ではなくて、“American Independence”の宣言書であると言うF. I. Carpenterの解釈が正確であると言えよう。²¹ 何故なら、Emersonが強調したのは「個」の尊重ということであって、事実、あらゆる国の人々にあてはまる、人間に普遍的な問題だからである。

The nationalistic note in the address, though often taken as the dominant one, was not dominant. Self-trust for the individual, no matter of what nationality, was the dominant note.²²

R. L. Ruskは、このように言っているが、けだし至言である。Emersonのnationalismは、即ちinternationalismに他ならないからである。

(3) 第三の問題点は、Emersonのほとんどの著作について言えることだが、この講演についてみても、どこかmonologueの感じがすることである。聴衆に対する問題提起は勿論であるが、どこか彼自身に対して語りかけている感がある。

I run eagerly into this resounding tumult. I grasp the hands of those next me, and take my place in the ring to suffer and to work... I do not see how any man can afford, for the sake of his nerves and his nap, to spare any action in which he can partake. It is pearls and rubies to his discourse. (p. 95)

このactionをたたえた一節など、正にその感が強い。それ故、actionのすめを「光」の部分として表面に打ち出したこの講演の、いわば「影」の部分とも言うべき一面については、是非ともふれておかなければならないだろう。そして、建前が講演の中にあるとすれば、本音は、彼の*Journals*中に吐露されていると言ってよい。

例えば、次に引用する一節は、34歳の誕生日を間近かにしての自己批判である。

Sad is this continual postponement of life. I refuse sympathy & intimacy with people as if in view of some better sympathy & intimacy to come. But whence & when? I am already thirty-four years old. Already my friends & fellow workers are dying from me. Scarcely can I say that I see any new men or women approaching me; I am too old to regard fashion; too old to expect patronage of any greater or more powerful. Let me suck the sweetness of those affections & consuetudes that grow near me,—that the Divine Providence offers me. These old shoes are easy to the feet. But no, not for mine, if they have an ill savor. I was made a hermit & am content with my lot. I pluck golden fruit from rare meetings with wise men. I can well abide alone in the intervals, and the fruit of my own tree shall have a better flavor.²³

これは、‘The American Scholar’ 講演のわずか4カ月足らず前の日記なのである。これが、あのアメリカ文化の自立を熱っぽく説き、また action をくりかえし勧めた講演者と同一人物の書いたものと思えようか。しかしながら、Emerson が自らの行動力の欠如をなげいた文章は、決してこれだけではない。注意深く彼の *Journals* を読むと、これ以前の青年時代は勿論のこと、以後にも何度かこの嘆きにぶつかる。実に、行動力の欠如こそ、自らの最大の欠点のひとつとして、少年のころよりくりかえし自己反省してきたものなのである。こうして、action をすすめる光の部分と、inaction をなげく影の部分とを対照してみると、彼の内面的屈折が理解される。Emerson が、公けの場で、人間の弱さを論ずることが極めて少なかったのは、決して銜いとか見せかけのためではなく、影の部分飛び超えて、人間の強さ、つまり人間性の信ずべき部分を凝視することによって、それを自らに説き聞かせようとしたからではないだろうか。この意味で、Emerson の著作の多くは、“monologue”，あるいは、「彼自身への説教」と解釈すべきであると言ってよいだろう。彼の講演の最も熱心な聞き手は、実は彼自身であり、彼のエッセイの最も重要な読者は、実は彼自身だったに相違あるまい。

(4) 最後に、この講演がアメリカの思潮に如何に関わっているかについてふれておきたい。

まず、“the near” や “the low” や “the common” の中に非凡なるものを見出し、“the meal in the firkin” や “the milk in the pan” の中に “the highest spiritual cause” を直観するという Emerson の romanticism の特徴を、時代思潮との関わりにおいて検討する必要があるが、これは別の機会に論ずることにして、次に、Emerson の pragmatism の問題を取りあげておく。

Emerson が、action の重要性を説いた一節は、次の通りである。

Action is with the scholar subordinate, but it is essential. Without it he is not yet man. Without it thought can never ripen into truth.(p. 94)

ここには、思想の有効性はその行動にあるという考え方があるが、後に、William James は、自分の所持していた *The American Scholar* の中のこの一節に、共感のマークを記している。²⁴ このことは、*Nature* と共に、この講演の冊子の中にも William James がアメリカの pragmatism の源流を見出したことを示していると言ってよからう。

次に、アメリカの democracy との関わりについてであるが、Emerson の思想は、ある意味で democracy の理論的基盤をなすものであると言える。彼の日記から、democracy と freedom の論拠について簡潔にまとめた文章を次に引用しておく。

...Democracy, Freedom, has its root in the Sacred truth that every man hath in him the divine Reason, or that, though few men since the creation of the world live according to the dictates of Reason, yet all men are created capable of so doing. That is the equality & the only equality of all men. To this truth we look when we say, 'Reverence thyself. Be true to thyself.' Because every man has within him somewhat really divine therefore is slavery the unpardonable outrage it is.²⁵

ここで Emerson が“Reason”と呼んでいるものは、自己の本体“the active soul”と考えてよい。万人は、生まれつき絶対善である“the active soul”を内蔵している。そして、本来あらゆる人間が尊厳性“dignity”を持った存在であるという意味では、個々の人間はすべて平等である。また、その尊厳性の顕現という意味では、個々の人間はすべて自由である。この私だけではなく個々のすべての私が、自由で尊厳ある存在だということである。

Emerson は、次のように言っている。

Another sign of our times, also marked by an analogous political movement, is the new importance given to the single person. Every thing that tends to insulate the individual,—to surround him with barriers of natural respect, so that each man shall feel the world is his, and man shall treat with man as a sovereign state with a sovereign state,—tends to true union as well as greatness. (p. 113)

「個人」「the single person」は、それぞれ「独立国家」「the sovereign state」の dignity をもって、真の連帯というものをめざさなければならない。全体

へと埋没した “the mass” や “the herd” のような存在, “bugs” や “spawn” にすぎないとして扱われる存在であってはならない。個人は、自らの尊厳性と主体性を待みにすべきなのである。そして個人の尊厳性を自覚しつつ農場で働く人間は、ただの “the farmer” ではなくて, “Man on the farm” であり、個人の主体性を信頼して思索し行動する人間は, “a mere thinker” ではなくて, “Man Thinking” なのだ, と Emerson は信じている。

こうした考え方は、すべて「人間の滞在能力への信頼」“confidence in the unsearched might of man” (p.114) に基づいた Emerson の人間観から必然的に生み出された思想であり, “self-trust” の信念に基いた democracy の主張である。そして、この ‘The American Scholar’ 講演は、新しい高度な人間観の創造を必要としている我々現代人に対して、思索の営みの原点に戻るべきことを示唆するものであると考えられる。

最後に、Emerson を “the Philosopher of Democracy” と呼んだ、John Dewey の Emerson 論の一節を引用して、この小論を結ぶことにしたい。

...the coming century may well make evident what is just now dawning, that Emerson is not only a philosopher, but that he is the Philosopher of Democracy....one may without presumption believe that even if Emerson has no system, none the less he is the prophet and herald of any system which democracy may henceforth construct and hold by, and that when democracy has articulated itself, it will have no difficulty in finding itself already proposed in Emerson.²⁶

[NOTES]

‘The American Scholar’ のテキストには、*The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, ed. Edward W. Emerson (Houghton Mifflin, 1903-4), Vol. I を用い、拙論中の各引用文のあとにその頁を記した。以下、W と略す。また日記については、*The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*, ed. W. H. Gilman et al (Harvard University Press, 1961-) を使用した。以下、JMN と略す。

1. *Literary History of the United States: History*, ed. Robert E. Spiller et al (Macmillan, 1948), p. 369.
2. *Selections from Ralph Waldo Emerson*, ed. Stephen E. Whicher (Houghton Mifflin, 1957), p. 57.
3. “Phi Beta Kappa” は、1776年、ヴァージニアの William & Mary 大学で創立

されたアメリカで最も古い“fraternity”であり、「哲学は人生の案内者」という意味のギリシャ語の頭文字を集めてできた名称である。Emerson は、卒業後になって、その名誉会員となった。

4. *JMN*, V, 84 (August 6, 1835).
5. *Ibid.*, 164-5 (May 30, 1836).
6. *Ibid.*, 187-8 (August 6, 1836).
7. *Ibid.*, 339 (June 29, 1837).
8. *Ibid.*, 347 (July 29, 1837).
9. *Ibid.*, 364 (August 18, 1837).
10. *W*, I, 415. Cited by the editor.
11. Oliver Wendell Holmes, *Ralph Waldo Emerson* (Gale Research, 1967), p. 115.
12. “I find in town the Phi Beta Kappa Oration, of which 500 copies were printed, all sold, in just one month.” *JMN*, V, 411 (October 24, 1837)
13. Cf. ‘Each and All’ (*W*, IX, 4-6).
14. *JMN*, V, 336 (May 26, 1837).
15. Cf. ‘The Fugitive Slave Law’ 1854: “...self-reliance, the highest and perfection of man, is reliance on God.” (*W*, XI, 236)
16. *JMN*, V, 112 (December 26, 1835).
17. Holmes, *op. cit.*
18. *W*, I, 415. Cited by the editor.
19. T. E. Cabot, *A Memoir of Ralph Waldo Emerson* (AMS Press, 1969), Vol. I, p. 321.
20. *JMN*, IV, 78-9 (September 1, 1833).
21. F. I. Carpenter, *Emerson Handbook* (Hendricks House, 1953), p. 55.
22. Ralph L. Rusk, *The Life of Ralph Waldo Emerson* (Columbia University Press, 1949), p. 265.
23. *JMN*, V, 322-3 (May 6, 1837).
24. Cf. Rusk, *op. cit.*
25. *JMN*, IV, 357 (December 9, 1834).
26. John Dewey, ‘Ralph Waldo Emerson’ in *Emerson: A Collection of Critical Essays*, ed. Milton Konvits & Stephen Whicher (Prentice-Hall, 1962), p. 29.